

眼科(選択)

研修科	眼科(選択)	
責任者	教授	日下俊次
指導医数	10 名	
研修期間	4 週間 ~ 16 週間	
受入可能人数	制限なし	
到達目標	<p>1. 医師としての倫理観・責任感・使命感をもって行動できる。</p> <p>2. プライマリ・ケアを実践できる基本的診療能力(知識、技能、態度)を身につける。</p> <p>3. 医療における安全管理の方策を理解し、患者ならびに医療従事者にとって安全な医療を遂行できる。</p> <p>4. 医療チームの構成員としての医師の役割を理解し、他のメンバーと協調して問題解決にあたることができる。</p> <p>5. 患者を全人的に理解し、患者・患者家族と良好な人間関係を確立し、予防を含む包括的なケアを提供できる。</p> <p>6. 医師としての社会的使命を自覚し、有限である医療資源を公平に配分し、効率的に使用することができる。</p> <p>7. 世界の医学研究の動向を理解し、最新の医学知識を修得するための英語能力を獲得し、国際保健の向上に貢献できる。</p> <p>8. 常に自らを省みて医学の研鑽と学習に励み、自己の向上に努める。</p> <p>9. 臨床活動の改善を目指し、見出した問題点の意義を検証し、研究課題を設定できる。</p> <p>10. 眼科医として必要な基本的人格を形成する。</p>	
行動目標	<p>1. 基本的技術と清潔操作を習得する。</p> <p>① 眼科的診断法を習得する。→細隙灯顕微鏡検査、眼底検査等を理解し診断法を学ぶ。</p> <p>② 眼科的検査を理解し、指導医とともに評価する。→視力検査、眼圧検査、視野検査、光干渉断層計検査、超音波検査、蛍光眼底造影検査等の検査方法を理解し、評価方法を学ぶ。</p> <p>③ 適切な眼科治療を選択し、理解する。→点眼薬をはじめとする薬剤処方、眼鏡コンタクトレンズ処方、レーザー治療(YAGレーザー、網膜光凝固)、手術等(白内障手術、角膜手術、緑内障手術、網膜硝子体手術)について理解し、学ぶ。</p> <p>2. 外来研修</p> <p>① 屈折異常(近視、遠視、乱視)、角結膜疾患(角結膜感染症、水疱性角膜症、円錐角膜等)、白内障、緑内障、網膜硝子体疾患(網膜剥離、糖尿病網膜症、網膜動静脈閉塞症、黄斑上膜、黄斑円孔、加齢黄斑変性等)、ぶどう膜炎、視神経疾患(視神経炎、視神経症)、全身疾患との関わりとして糖尿病や高血圧・動脈硬化、膠原病、神経疾患に伴う眼底変化等の診断と治療について理解を深める。</p> <p>② 網膜剥離、眼球打撲、穿孔性眼外傷、急性緑内障発作等の救急処置を要する症例を経験し、理解を深める。</p> <p>③ 視力検査、眼圧測定をはじめとする種々の眼科検査機器の操作を学ぶ。</p> <p>④ 当科で専門性の高い小児網膜疾患(先天疾患、未熟児網膜症等)について、診断と治療法を学ぶ。</p>	

<p>方略 (LS)</p>	<p>眼科については、一般診療において頻繁に関わる眼科的疾患への対応、基本的な眼科診察手技の習得、手術手技の取得を外来研修、病棟研修、手術研修を通じて養っていく。</p>
<p>評価 (EV)</p>	<p>研修医が到達目標を達成しているかどうかは、各分野・診療科のローテーション終了時に、医師及び医師以外の医療職が別添の研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを用いて評価し、評価票は研修管理委員会で保管する。医師以外の医療職には、看護師を含むことが望ましい。 上記評価の結果を踏まえて、少なくとも年2回、プログラム責任者・研修管理委員会委員が、研修医に対して形成的評価(フィードバック)を行う。 2年間の研修終了時に、研修管理委員会において、研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを勘案して作成される「臨床研修の目標の達成度判定票」を用いて、到達目標の達成状況について評価する。</p> <p>研修医評価票</p> <p>Ⅰ. 「A. 医師としての基本的価値観(プロフェッショナリズム)」に関する評価</p> <p>A-1. 社会的使命と公衆衛生への寄与 A-2. 利他的な態度 A-3. 人間性の尊重 A-4. 自らを高める姿勢</p> <p>Ⅱ. 「B. 資質・能力」に関する評価</p> <p>B-1. 医学・医療における倫理性 B-2. 医学知識と問題対応能力 B-3. 診療技能と患者ケア B-4. コミュニケーション能力 B-5. チーム医療の実践 B-6. 医療の質と安全の管理 B-7. 社会における医療の実践 B-8. 科学的探究 B-9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢</p> <p>Ⅲ. 「C. 基本的診療業務」に関する評価</p> <p>C-1. 一般外来診療 C-2. 病棟診療 C-3. 初期救急対応 C-4. 地域医療</p>
<p>責任者からの一言</p>	<p>眼科は高度に専門分化した科である。眼球というひとつの臓器にも関わらず、角膜、水晶体、網膜硝子体、視神経と専門領域は細分化され、各々に複雑な病態が存在する。眼科用診療機器はレーザーや光学技術の開発によりめざましく進歩しており、眼科的検査を通じて、最先端の診断技術を体験して頂きたい。また、眼科領域の所見は全身の病態を反映するため、他科と臨床的に関わることも多い。例えば眼底検査では全身の動脈硬化や炎症の状態を直接観察することができる。糖尿病をはじめとする全身疾患に興味があれば、眼科研修でその理解を深めることをお勧めしたい。また、繊細な顕微鏡下での手術に興味があれば、研修で実際に助手として介助を行い、体験して頂きたい。</p>